

忘れられた子たち



日本の底辺、ふきだまりの人生をゆく西成釜ヶ崎に暴動が起きてから一カ月余りの日がすぎた。地元も、警察も、府も市もヒタイをあつめてスラム地帯の総合対策へのりだした。ヤミ手配師の一掃と公設職業紹介、医療設備の拡充、低家賃アパートの建設、生活相談所、防犯相談、児童福祉のための生活館等々。

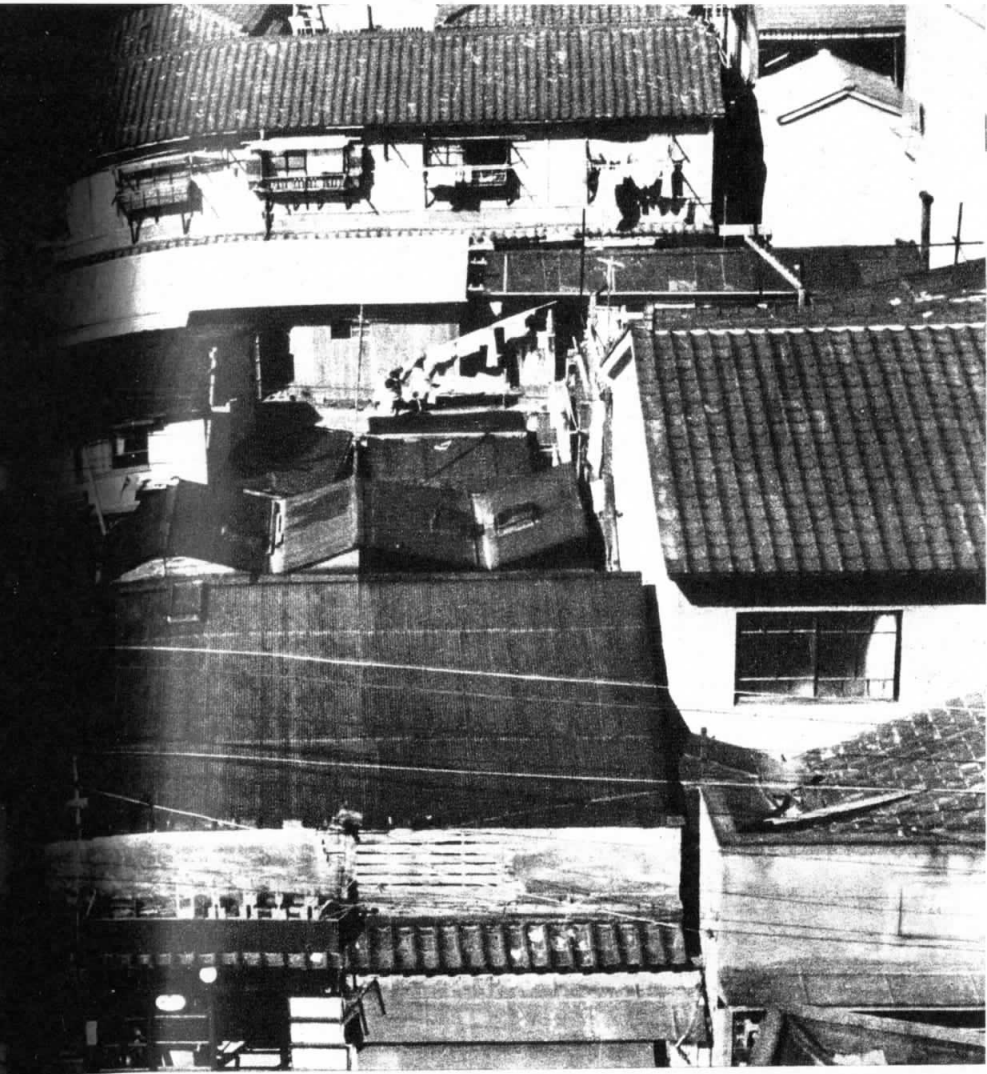
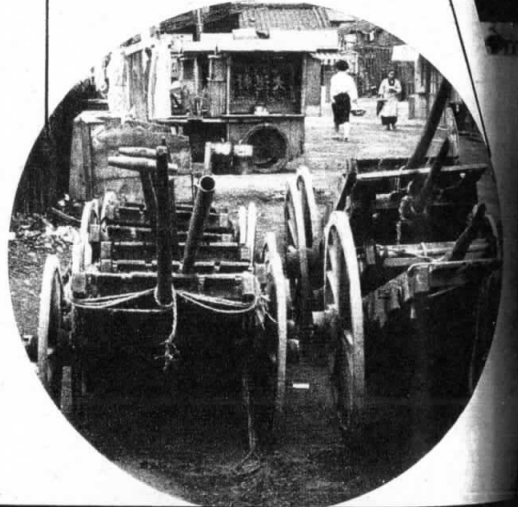
しかし、釜ヶ崎暴動はそこに住む子どもたちの幼い胸に、大きなショックを与えたのではなからうか。無謀な大人の行為が、これから育つてゆく子どもの上にどう影響があらわれるか心配である。おとなへの不信を深めたか、あるいは共鳴する試金石であったのか……。いずれにしても、この騒ぎの中に忘れられた子たち”の問題が気にかかる。

金があればあるかぎり酒のみ、パンコや私設競輪に熱中し、うまいもでも腹いっぱい食ってから死にゃ本意だ、くらいに考えているような住人が多い不幸な地域。子どもたちにとっては、善と悪の判断すら教えこまれな貧困地帯である。



釜ヶ崎の住人は、推定で約四万人。住民登録をしない、いわゆる“無籍者”が一万人もいるといわれている。それが、約二百軒にちかいドヤやアパートに住んでいる。この中で約六千人が日雇に出るといふ。日雇に出ない連中は、売春、ポン引き、シケはり、立ちん坊、暴力団、麻薬、窃盗、恐喝など犯罪につながる黒い生活と、その日その日をどうにか生きてゆけばよいという怠け者が多いようだ。

社会学者はこの地域を「社会解体地域」とよぶ。彼等は、非組織的で、生活の意識をもたず、虚無的で衝動的で、つよい劣等感とその裏がえしの正義感もみせる。“飢えているから働く”のであって、酒のみたくなかったら労働をしない。労働意欲は少く、余分の収入があっても貯蓄など考えない。スラムの問題のむづかしさ根の深さに悲観的な見方もある。しかし、世間一般の所得倍増ゲームの底におき忘れられた彼等の、この反社会的なエネルギーは、どうしたらまともな方向にむけられるのだろうか。

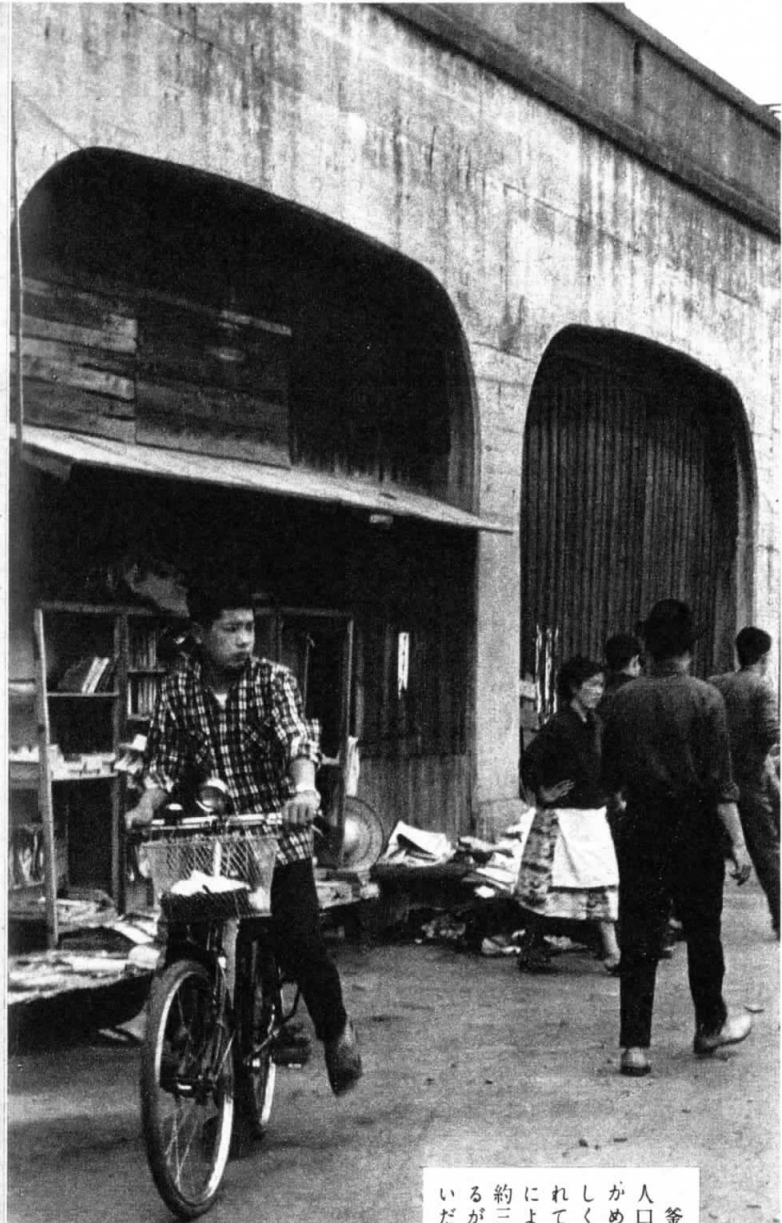


大阪の夏はむしように暑い。特に夕なぎのたそがれ頃からのむし暑さが、逃げ場のない人たちの非衛生的な環境が狂気をみちびくのかかもしれない。





スラム地帯はその生活を明るくすることではなく、スラムを
 解消する方向にもってゆくことが根本的な対策である。そこ
 に福祉国家としての希望と夢がある。

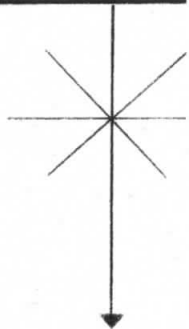


釜ヶ崎地帯の正確な
 人口動態は役所でもつ
 がめない。記録もとぼ
 しく、推定だけできな
 れているようだ。登録
 によると、釜ヶ崎には
 約三千人の子どもがい
 るが、事実はもっと多
 いだろう。



か入ることになるであろう
 が、忘れてならないのは、
 ここに巣立つ数千人の子ど
 もたちの教育の問題である
 大都市のまん中にある不
 就学児地帯、こんな生活を現
 代社会が放っておいてよい
 ものではない。スラム浄化
 も、次の世代に希望をかけ
 て、この子らを守ってゆこ
 うではないか。

こんどの暴動にまきこま
 れた子どもたちのほとんど
 は、
 釜ヶ崎文芸会編、三三三三



釜ヶ崎には、一畝地にまみれた生活のために、世の荒波をさけて、最低の生活に甘んじながら住んでいる人もある。そうしたこの子どもたちは孤独だ。貧しさが子どもをかまわなくなるのだから、親は隣ぎにいそがしく、放り出された子どもたちは、道路で遊んでいてもすぐ近よってくる。人なつこい目でじっと相手を見る。



この子らに愛の手を！

力が発達した目で観察してから、キゲをいせると、すぐ友だちのように親しみをみせる。どこにあっても子どもの世にないものである。この子らが無事に成長することを祈りにも似たきもちである。

